

医師パラケルススの思想
- 現代医学の在り方に対する再考 -

立命館大学大学院
応用人間科学研究科
対人援助学領域
人間形成・臨床教育クラスター
丸谷 佳嗣

現代における医学は、医療者と患者の関係、インフォームド・コンセント、移植治療、終末期医療、医療者の職業倫理など、それらを論じる倫理的原理や法について問われており、その際、医療とはいかなることか、多くの場合、暗黙の了解とされてきた。しかし、最近のエンハンスメント問題への注目が示唆されるようになり、暗黙の了解の前提が揺らぎ始めている。健康とは何か、医者とはなにか、人間とはなにか、といった哲学的問いについて考察せねばならなくなった。

15 世紀ルネサンスの医師、パラケルススという人物に注目する。彼の医学には、人間とはどういった存在なのか、医者とは、健康と病気とはなにか、その考察が力強く展開されている。パラケルススとは一体どういった人物だったのであろうか。第 1 章にて彼の生涯を追い、いかに知識体系が構成されていったか記述していく。彼は、古代医学に絶える権威的な大学の、そして医学の在り方を徹底的に批判した。パラケルススは敬虔なキリスト教信者であり、貧者と病人の味方である。それは生涯をかけて貫き通したものであった。第 2 章では彼の病因論の中に見える医学と宗教の統一性について、著作『奇蹟の医書』を主軸に考察していく。パラケルススの医学の師は、大学や医師だけではなかった。必要ならば、錬金術師や魔術師、魔女、卑しい者、貧者、理髪師（当時において身分は相当低い存在）等、様々な人物から教えを請うた。それが「自然」についての理解に必要なためである。経験主義を掲げていた彼は多くの知識を「自然」から学んだが、最後にたどり着くべきは偉大な神の知識・技術であった。第 3 章では、彼の著作『奇蹟の医の糧』や他のパラケルスス研究の資料を用い、総括的に彼の思想を記述していく。パラケルススは、医師の基礎として「哲学」、「天文学」、「錬金術」、「倫理」の四柱を示した。彼にとって医師とは、「哲学（科学）」によって自然を理解し、「天文学」によって天体を把握し、「錬金術」によって前の二つの基礎を確立した薬剤を精製し、そしてそれらの全てを信心深い秩序ある倫理のなかで行うことで、真となりえた。しかし、どれだけ優秀な医師であっても人の死には逆らえない。パラケルススは、人の可能性と有限性を時間の流れ、生と死のなかで説いている。ここでも神への絶対的な信仰が窺い知れた。

中世医学と現代医学の技術レベルは比較にならないものだが、なぜ中世の医師パラケルススを取り上げられるようになったのか。そこには彼の持つ権威的な知識体系に反抗する闘争心、信仰心からくる患者への愛、意思として貫き通された揺ぎ無い倫理など多くの魅力が感じられた。現代における医学の在り方、現代科学の在り方をパラケルススを通して再考することが本書の目的である。